

タイトル (活動概要)	05 ミニ漢字テスト	アプローチ (関連する力)		「自分づくり」③ 「仲間づくり」⑬	
タイミング (実施時期)	4月を中心に通年	活動場所	教室	所要時間	10分
対象学年	幼・ 小低 ・ 小中 ・ 小高 中1・中2・中3・高	対象規模	学級	活動場面	国語(帯単元として継続する)
活動のねらい	<p>〈背景〉被受容体験の不足に学力不振も重なり、自己肯定感の低い子どもがいる</p> <ul style="list-style-type: none"> ・10問(低学年は5問)だけの漢字テストへの取り組みを通して、努力すれば満点がとれるという達成感を一人残らず全員が感じとる ・「この子は学習が苦手な子」などという周囲の子たちの思いこみを変革する 				
準備	<ul style="list-style-type: none"> ・テスト用紙 ・漢字ドリルや国語教科書の巻末など、出題する漢字が予告できるもの 				
学習・活動		支援の観点・留意点等		資料等	
1 導入(最初の活動のときだけ)					
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;">漢字練習をがんばってミニ漢字テストで満点をとろう</div>					
2 主活動 ○漢字テストのやり方を説明する <ul style="list-style-type: none"> ・出題する漢字は予告するという事 ・何曜日の何時間目に行くかということ ○漢字テストを行う <ul style="list-style-type: none"> ・その日のうちにまるつけをして返却する 		<ul style="list-style-type: none"> ・最初の数回は、練習時間を20分程度とり、練習方法の指導を行う ・がんばれば高得点がとれるという体験をさせる ・練習時間内に漢字が苦手な子に対する個別指導を行う ・慣れてきたら、家庭学習で練習してくる設定に移行する 		漢字ドリルまたは国語の教科書	
3 ふり返り <ul style="list-style-type: none"> ・ふり返りの意味が生まれた時をのがさず、教師からふり返りの話をする 		<ul style="list-style-type: none"> ・著しく得点を伸ばした子を紹介し、最初から満点がとれることもいいことだが、できなかったことができるようになることに大きな価値があることを話す ・初めて満点が取れた子などの感想を聞いておき、紹介する 			
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> ・漢字学習が苦手な負担が大きくなる子どもがいる場合は取り組まない ・「学習が苦手な子が達成感を感じる」というこのプログラムのねらいを十分に意識するようにし、単なる漢字の学習で終わらないようにする 				

ミニ漢字テストの実践から

学習が苦手なAくん

「あ、わかんない。オレの将来の姿が見えた。オレの将来真っ暗だ・・・。」Aくんは、算数の問題を一人で解く際や理科や社会のノートをまとめる際などには、途中で投げ出してしまい、こんな独り言をブツブツ言うのでした。また、掃除や給食の当番でも、友達にちょっと指摘されただけで、仕事を投げ出して教室の隅にすわりこんでしまい、「一人にして・・・」と言って、落ち着くまでしばらく泣いているのでした。

そんなAくんの転機となったのが、ミニ漢字テストでした。Aくんは算数など積み上げが要求される内容ではすぐに結果が出せないけれども、漢字ならば少し練習すればある程度覚える力がありました。そこで、担任はAくんがミニ漢字テストで達成感を感じられるように工夫することにしました。

最初の一回は、特別にAくんに声をかけることはわざとしませんでした。テストの点は20点。二問だけしか書けなかったのです。2回目以降には「やればできる」ということを際立たせるため、練習時間にさりげなく声をかけ、Aくんがどのくらい覚えたかチェックし、練習時間を十分にとりました。

結果は、見事に80点。Aくんは「やったー！」と言いながらにこにこ顔でテストを受け取りました。

保護者との信頼関係の形成

テスト用紙は、返却するたびに台紙にしている色画用紙にのりづけして記録する約束になっています。この日は3時間目ははじめに返却したので、学級のみんながすぐにのり付けの作業をはじめました。

ところが、Aくんは台紙を出そうともせずすぐに漢字テストをしまっていました。不審に思い、のりづけを促すと、「今日は持って帰るから貼らない」と言います。80点のこのテストを母親に見せたかったのです。うれしそうな笑顔を見て今日は特別にそのままでいいことにしました。

後日、母親との面談の際には漢字テストが80点だったことを一緒に喜んだと聞きました。自分の子どもの学習意欲が低いことや友達とのトラブルが多いことを入学時から気にして、何かあると学校との関係がうまくいなくなることもあったという保護者なのですが、このような事実があることにより、言葉以上に保護者との信頼関係のモトがつくれるような気がします。

学級のみんが自信を持ち、認め合う雰囲気をつくる

Aくんが80点だったことを、わざと周囲に聞こえるように言いました。一番仲のいい友達が、「すごいじゃん」などと声をかけていました。練習時間が十分にあったのでほとんどの子が満点だったのですが、それ自体、学級全体に自信を持たせる意味もあるのだと思います。また、そんなときほど、子どもたちにも気持ちの余裕があり互いに優しい言葉がかけられるような気がします。

時期を見て、満点という結果だけが大事なのではなくて、最初は苦手だったことを克服していく姿勢に意味があるということをお話しました。そのときには、一人の子が「Aくんって、3年生のときと比べるとすごく成長したと思うよ。なんか、近ごろ、あんまり怒りっぽくないもん」と発言してくれるなど、いつも問題を起こす子どもというふうに見られがちなAくんを見る目が少しずつ変わってきました。

漢字に限らず、小さな課題で着実に結果を出せるという取り組みは、学級づくりの一つの基礎になるものと確信しました。学習という学校の中心的な機能をもとに自己肯定感を高めるという方法は、さまざまに工夫していく必要のあることではないでしょうか。